むなかた

令和五年　葉月　751号

目次

中津宮七夕祭　3・2
宗像みあれ芸術祭2023　4
中津宮祇園祭　4
信州りんご・高原野菜奉納式　5
みこころ　5
神宝館だより　6
宗像大社歌会詠草　7
御造営奉賛者御芳名　7

よって。新型コロナウイルスが収まりつつある中、全国各地で夏の神事が本来の姿を取り戻し、盛大に斎行されたとの報道を多く目にした。夏の神事には、疫病退散や除災を祈り、大小様々な神輿や山笠・山車が巡行する大規模なものが多いため、相応の奉仕員数や準備期間が必要となる▼夏に限らず地域の祭りは、その祭事毎に氏子共通の祈りがあり、また互いの協力がなければ祭りは成立しない。地域の祭りから子供たちは、その意義や社会のルールを教わり、地域への誇りとそこで生きていくという覚悟を確認してきた▼ある地域では住民の繋がりの希薄さを憂慮し、子供神輿を設え、新た祭りを行った。理由は不明だがその神輿とは、神様を奉戴しないものであり、祭りは数年ともたずに取りやめとなった事例もある▼社会の生活様式や自然環境の大きな変化を乗り越えるためには、地域が協力し、共通の祈りを捧げる本来の祭りの継承が、より大きな意味を持つのではないか。（長）

中津宮七夕祭

八月七日午後八時より筑前大島の当大社中津宮境内を流れる天の川を挟んで祀られている末社牽牛社と織女社において七夕祭が斎行される。

この七夕の物語や風俗は、中国古来の伝説と乞巧奠（※手芸や裁縫の上達を願う儀式）の風俗とが伝来し、我が国固有の棚織女（※年に一度、水辺の機屋で神とともに一夜を過ごす聖なる乙女）に関する信仰に習合されたとするのが通説となっている。

同社における七夕神事は『正平年中行事』（一三四六）に「七夕虫振神事」とあり牽牛社、織女社に参籠し、水に映る姿によって男女の縁を定める信仰が記されており、また福岡の儒学者貝原益軒が著した『筑前國續風土記』でいうように早く『石見女式髄脳』や『古今集榮雅抄』の歌論書に見えるところから少なくとも鎌倉時代にまで遡る信仰といわれている。

さらに上の両著は京で成ったものであることから、当宮の七夕信仰は古くから中央にまでその名の知られていたことが窺われる。

現在の摂末社には織幡神社、縫殿神社があり、古記によると応神天皇の御代、中国より帰化した阿知使主が遣わされた呉國から筑紫に帰還した際、天皇と宗像大神に織女（兄媛）を献上したとされ、爾来宗像大神は機織の業に深い縁故を有し、織縫の技は大神の奉仕から起って各地に伝播したとある。この御由緒からも当地が当時の一大産業である機織業を早くから取り入れていたことがわかる。

昭和一六年に同宮に参拝された武田祐吉文学博士は境内に立たれ「織女社」「牽牛社」「天の川」「かささぎ橋」の神聖さを見られ、日本の七夕信仰はここに始まる、とされて

”いかなれば　とだえそめけむ天の川
　あふせにわたす　かささぎのはし“

と詠まれた。

これらの物語・風俗が筑前大島には今も形として伝えられている。

七夕関連のお知らせ

中津宮が奉仕する七夕祭の他、関連するイベントをお知らせいたします。

七夕祭当日は、島内の子供たちや有志一同で作成した「竹あかりの鳥居」（※上記写真）の他にも多くの竹あかりで境内を美しく彩ります。是非大島まで足をお運びください。

★大島七夕マンス（七月七日～八月七日）、八月七日に向けて、島内を七夕の装飾で彩っています。

・中津宮にて七夕特別ご朱印を授与
・島内各所に七夕短冊を設置渡船ターミナルで販売
・天の川で願いを込める「祈り星（ガラス玉）」

★七夕まつり（八月七日）

・出展・ステージイベント　十六：三〇～

■問い合わせ先

元気な島づくり事業推進協議会事務局
〇九四〇―七二―二二一一

※大島発二十一時の臨時便が出航します。

世界遺産宗像
宗像みあれ芸術祭２０２３ 作家決定

古代の精神を受け継ぐ会場に
多彩なアート作品が並びます

宗像の自然・歴史・文化・風土・景観などを活かしたアート作品およびプロジェクトを、多彩な表現分野の作家たちが手がけ、会場を巡りながらお楽しみいただけます。

・石原稔久×iima（陶芸家×音楽ユニット／福岡）
・浦川大志（作家／福岡）
・ザイ・クーニン（現代美術家／シンガポール）
・渋田薫（現代美術家／京都）
・戸室太一（建築家／東京）
・中林丈治（彫刻家／神奈川）
・橋本次郎（音楽家／兵庫）
・吉田重信（現代美術家／福島）

中津宮祇園祭

七月十五日、午後二時より中津宮末社須賀神社において祇園祭が斎行された。当日は薄雲が掛かるも晴天となり、暑さ厳しい天候の中、大島山笠保存会会長を始め法被姿の子供から大人まで多くの島民が参集し、滞りなく祭典は納められた。祭典後には山笠二基、子供山笠二基が熱気を帯びた奉仕者によって勇壮に島内を巡行した。沿道で各家々から力水を掛けられると更に勢いを増し、大きな掛け声とともに駆け回り各巡行道で大いに賑わいを見せた。コロナ禍により四年振りの開催となった直会にも多くの氏子が参列し賑やかに執り行われ、コロナウイルス感染症対策の制限の無い通常開催となった本年の大島祇園山笠は終了した。

長野県産 信州りんご・高原野菜奉納式

八月十九日午前十時、ＪＡ長野八ヶ岳、ＪＡ松本ハイランド、ＪＡあづみなどのＪＡ長野県グループと長野県松本市の観光プロモーション課、フジドリームエアラインズ等、長野県産農産物・観光関係に携わる諸団体より信州りんごと高原野菜が奉納される。

この奉納は平成二十四年に山のまち「松本」と海のまち「宗像」で交流を深めようとはじめられた。過去三回は秋に「シナノスイート」と「シナノゴールド」の二種類であったが、この度は夏の時期ということで「夏りんご」である「シナノリップ」、「サンつがる」と信州の高原野菜「レタス」、「白菜」合わせて約一五〇個が奉納される。

「シナノリップ」とは平成三十年に品種登録された長野県生まれの新しい品種で甘味、酸味のバランスがよく、歯切れのいい食感で果汁が多く、みずみずしいのが特徴である。

当日はご参拝の皆様にも「シナノリップ」、「サンつがる」、「レタス」の三種類合わせて約三〇〇個のお裾分けを準備しておりますので是非お越しください。なお、今後の天候状況によって内容が変更となる場合がございますのでご了承ください。

サンつがる

シナノリップ

みこころ

長く続いた梅雨も明け、青空の似合う季節がやって参りました。まだまだ暑い日が続きますので、皆さまどうかご自愛ください▼今年は六月から暑さが絶えず続いており、冷房が欠かせないというご家庭も多いことと存じます。そんな時はドライブがてら近くの海に出向き、波の音を聴きながら星空に想いを馳せてみてはいかがでしょうか▼海といえば、宗像大社の三社のうち二社は海に浮かぶ島であることをご存知でしょうか?「神宿る島 沖ノ島」と「神護る島 大島」。それぞれの島に沖津宮、中津宮と位置しており、長女さま次女さまが鎮座していらっしゃいます▼そんな大島 中津宮ですが、七夕伝説発祥の地と言われており、境内には「天の川」と呼ばれる川が流れております。また伝説に倣い、今月七日二十時には七夕に関した祭典が催行されます▼先月七日から今月七日まで期間限定で七夕の御朱印も授与しておりますのでお時間ございます方は是非、足を運ばれてみてはいかがでしょうか?（優）

神宝館だより 76
八万点ノ国宝収蔵

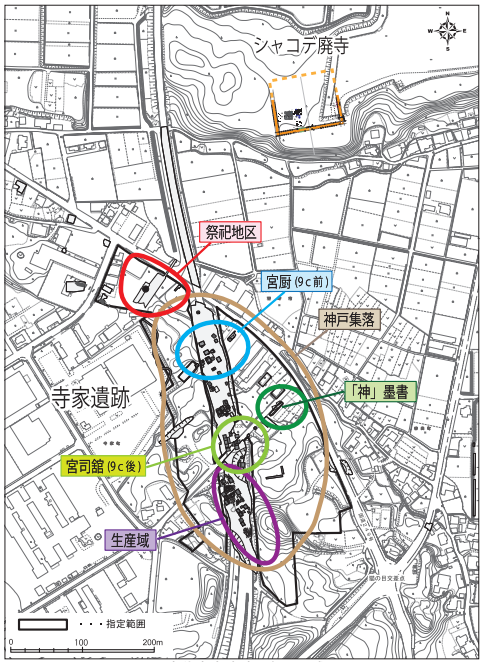
能登半島視察記③

寺家遺跡は、古代気多神社の様子や、同神社を支えた祭祀集団の実態を考古学的に示す貴重な遺跡で、国史跡に指定されている。発掘調査で六世紀～一四世紀前半までの遺構や遺物が確認されているが、遺跡の主体は八～九世紀である。

遺跡中央部で確認された八世紀前半の竪穴建物群からは、海獣葡萄鏡・素文鏡・三彩陶器・皇朝銭・ガラス坩堝などの祭祀遺物が出土した。ガラス坩堝はガラス生産を示すもので、その生産は当時、飛鳥池工房遺跡のように宮殿・都城に深く関わる官営工房として管理されていた。ガラス坩堝は、寺気遺跡に、中央の官営工房から工人が技術とともに招かれ、ガラス工房が存在したことを示す。以上から、同建物群一帯は国家の関与のもと、神祇祭祀とその準備や生産に専従した「神戸」集落が展開した可能性が高いとされる。

八世紀後半、この竪穴建物群は掘立柱建物に建て替え再編され、九世紀には大型掘立柱建物を中心とする施設群にさらに再編されたことも判明し、多くの祭祀遺物とともに出土した「宮厨」「宮」「司」「司舘」の墨書土器から、当時、神饌や祭宴の準備を行う「宮厨」や「宮司舘」を備えた中枢施設群が整備されたことも判った。施設群の南には製塩・鍛冶・菜園などの生産遺構も見つかった。

遺跡北側の八世紀後半の「大型焼土遺構」は、強く被熱した明赤色の粘土遺構で、海岸砂丘上に山砂を、その上に粘土（焼土層）を広範囲に敷き詰めて、燃焼のための場を人為的に設けている。焼土層は二層以上重なり、間に炭や灰の層がないことから「粘土面の設置→燃焼行為→清掃行為→（複数回の繰り返し）→粘質砂土による被覆」という一連の祭祀行為を伴う祭祀空間がこのエリアで形成されたとみられる。寺家遺跡の文献上の初見は『万葉集』にみえる、七四八年大伴家持の能登国巡行、「気太神宮」参拝で、本遺跡は、この記述をはじめ文献史料と考古学的成果の整合性が高い点も非常に重要といえる。（福）



古代寺家遺跡の主要な成果（参考資料②から転載）

大型焼土遺構（上図の祭祀地区）
山砂と紅い粘土焼土層は外部調達とみられる

※参考資料：
①『史跡寺家遺跡保存管理計画書』（2014年、羽咋市教育委員会）
②中野知幸「古代能登の境界性から見た寺家遺跡と気多大社」
（2022年、沖ノ島と関連遺産群特別研究事業第3回国際検討会報告書）

第744回　宗像大社歌会詠草

■大西晶子選　■毎月25日〆切（順不同）

宗像に住み五十年　多くの友と米寿迎える　秋吉　喜範

長い年月宗像で暮らす作者。たくさんの友人を得て楽しい日々を過ごされたのだろう。三句が足りないので〈ここで得し〉と入れては。

トリモチの樹を飛降りて足に竹刺さりし兄はもう風となる　早川　祥三

亡くなった兄を偲ぶ歌。幼少時の思い出の中にまだ兄は生きている。結句は〈風となりたり〉とすると印象が強くなる。

玄海の風をたくみに利用してアサギマダラは飛んできたりぬ　佐々木和彦

アサギマダラの渡海に感動した作者。二句以下を〈風にたくみに乗りて来しアサギマダラがわが庭を飛ぶ〉と「わが」を入れると作者の実感が強く出る。

おーいまだ和議はならぬかまだなのか夏至もうすぐと雲は告げている　山﨑　公俊

ウクライナとロシアの戦争は時間が経つにつれますます混迷を深めているようだ。夏至は過ぎてしまったのに、本当に和議が早くできて欲しいものだ。

運転士になるのが夢の五歳児はすやすや昼寝おもちゃの電車と　堺　玲子

五歳児らしい夢をもつ子は昼寝をするときもお気に入りの電車をそばから離さないのだ。平穏な午後のひとときが素直に詠まれていて好感が持てる。

虹色の尻尾だけ出し隠れたるとかげも日かげが恋しい季節　本田エリナ

背中から尾にかけてきれいな虹色に光るとかげは若いニホントカゲだそうだ。きつい陽射しを避けて隠れているつもりのとかげが可愛らしくユーモアがある。

やわらかに光る若葉は幼子の声なく笑う頬に似ている　吉﨑美沙子

機嫌よく笑う幼児の頬のような無傷の若葉を想像する。若葉には産毛に似た細かい毛があったり、どこか幼児の心と体の柔らかさに通じるようだ。

梅雨さなか白き円錐天を指し人知れず咲く南天の花　東　雅子

南天の花の形状をよく表した歌。ひっそりと咲く白い円錐状の花は天と会話しているのかもしれない。

◆選者詠

孫の居ぬいまパソコンをつかひませうユーチューブ見せよと言はれぬうちに

炎帝にものみな乾くまなつびを栗のみどりの毬ふとりゆく

第714回　俳句

木漏れ日の子安地蔵に遊びけり　早川　祥三

御造営奉賛者御芳名

（令和五年六月）（順不同・敬称略）

一〇〇、〇〇〇円

ムラサキテンニョ

三〇、〇〇〇円

北九州市　㈱スエヒロ

一〇、〇〇〇円

出雲市　堀江　秋佳

五、〇〇〇円

川西市　上田　侑吾
桐生市　諸岡　和子
渋谷区　本多　真美
千葉市　池田　一仁
豊中市　㈱シャングリ・ラ
長崎市　木山　美穂
八王子市　番場　嘉雄
広島市　ここぺりはうす
福岡市　伊藤　浩司
福津市　井澤咲恵子
山口市　藤井　楓

三、〇〇〇円

大阪市　福地　昭義
福津市　大庭　悦子

二、〇〇〇円

朝倉市　矢野　宙之
大阪市　新潟美代子
岡山市　荒木　一雄
三条市　坂内　章浩
新宿区　山崎紗由香
中津市　耶馬の白酒酒造元・しまざわ
成田市　荒井　清
福津市　山下　武彦

むなかた
葉月（はづき） 第751号

8月 まつりごよみ

1日	総社月次祭	午前11時
	引続き 高宮祭、第二宮第三宮祭	
	宗像護国神社祭	
7日	中津宮七夕祭	午後8時
	於：中津宮（宗像市大島）	
15日	総社月次祭	午前11時
	引続き 高宮祭、第二宮第三宮祭	
	宗像護国神社戦没者慰霊祭	
	於：宗像護国神社	午後7時

宗像大社

編集後記

編集中、沖ノ島に勤務していたが無風であった日が数日続き、扇風機の前から動くことが出来なかった。エアコンのある生活の有難さを身に染みて感じた▼七月中旬から下旬にかけて、各地で気温が上昇し猛暑日が続いた。熱中症アラートも発令され外での活動に危険を及ぼす暑さとなった。これから迎える八月はどのような暑さになっていくのか恐怖すら覚えた。海外でも五〇℃を観測する地点や、熱波で人が死亡するニュースも見受けられる▼一昔前は三〇℃を超えると騒ぎになっていた気がするが、今や平気で超え、四〇℃に迫る気温である。年々暑くなる夏に真正面から立ち向かうしかないのだろうか。少しでも涼がほしいと感じた勤務であった。（黒）

2023年8月1日発行（月刊）／宗像大社　〒811―3505　福岡県宗像市田島2331　電話（0940）62―1311（代）　https://www.munakata-taisha.or.jp/